NY エッセイ ⑧

中瀬 有紀



Midsummer Night Swing at Lincoln Center with Soul Train on Tuesday, June 28, 2011

異文化交流

ナダール（Nadar：本名Gaspard-Felix Tournachon）は、著書『My Life as a Photographer（私が写真家だった頃）』(translated by Thomas Repensek)の中で、A Golden Age of Science（科学の黄金期）の19世紀を生きた人々が、写真という新しい技術に出会った時の様子を、"stunned"（あぜん・がくぜん・ぼうぜんとして）と表現しています。

1830年代から40年代にかけて作家として、また演劇制作者として生計を立てていたナダールが、写真家として有名になったきっかけは肖像写真です。1850年代にパリで開業した彼の写真館には、幅広い交友関係から多くの著名人が訪れました。肖像写真はそれまでの肖像画に変わる新技術であるとともに、ナダールは「写真は芸術だ」と言って広く薦めますが、当時の人の中には写真に撮られることを怖がる人もいたようです。19世紀の人々にとって写真は異文化であり、それによって世界が変わることを恐れたのでしょう。

現在の私にとって一番身近な、最大の異文化はアメリカです。私の課題は、私がその異文化を受け入れることと、（アメリカ側からしてみれば）異文化を持つ私がアメリカ社会に受け入れてもらうことの二つです。これらの難題を前にした時、"個性を伸ばす"よりも"協調性を伸ばす"努力が重要となります。

日本国内にも、舞台照明とテレビ照明の違いをはじめ各照明会社にそれぞれ独自の体制があるように、照明業務は組織の影響を大きく受けます。そして現場は常に共同作業であるために、協調性が仕事の効率をあげます。そのために私はアメリカで照明作業をするにあたり、体に染み付いている器材を取り扱う感覚と器材から放たれる光の感覚以外は、日本で学んだことを頭の隅に置いて新しくアメリカ独自の方法を身につける必要がありました。

異文化は時に衝撃的で、今までの常識を全て覆す力を持っています。しかし同時に、今までと違った世界の見え方から人間と社会の理解を深め、新しい発想を与えてくれます。私にとってアメリカ留学の最大の糧は、日本人としての私、私の中の日本文化、世界の中の日本、そしてアメリカの影響を大きく受ける日本などを改めて知ったことかもしれません。それはまるで、ナダール写真館で撮った肖像写真の中に佇む、初めて目にする自分のようです。